

市内人口の3分の1が3日間すごせる物資が備えられる相馬市防災備蓄倉庫を見学する嘉手納高総合学科の生徒ら＝福島県相馬市



震災後の街づくり 福島で学ぶ 嘉手納高生がSDGs研修

【嘉手納】県立嘉手納高校総合学科のSDGs研修旅行がこのほど実施され、1～2年生10人ほどが東日本大震災による津波や東電福島第1原発事故で被災した福島県などを訪れた。現地で被害の実態を体感するとともに、原発事故の影響で立ち入れない街と、自らの生活圏で立ち入れない米軍嘉手納基地を重ね、互いに目の前にある場所に入れないのは同じという共通点も実感。さまざまな状況下で街をつくるとはどういうことか、生徒らは多くの学びを得た。

研修旅行は8月19日～22日に行われ、福島県相馬市や浪江町、双葉町などを訪問した。石原月菜さん(16)は双葉町での語り部との交流から「やはり体験した人の話を聞かないと分からない。自分も油断せず、被災したときに後悔しない行動が取れ

たらと思う」と振り返る。

玉城瑤太さん(16)は、原発事故で住めなくなり更地になった土地へのソーラーパネル設置や、備蓄倉庫などを回り「今後の災害に備えて、沖縄でも自分の聞いたことを伝えたい。できる工夫はしておいた方がいい」と語った。

比嘉祐子さん(16)は、双葉町の街づくりを進める一般社団法人ふたばプロジェクトから聞き知ったことを思い起こした。

「原発事故で一度人が消えて、今も住める地域は2割ほど。県外から新たに街づくりに参加したいという人もいるそう。大きな地震などを私たちは経験していないので、危機感を持って周囲を引っ張って行けばいい」と話した。

研修結果は今後、総合学科発表会で報告される。(石井恭子)